

令和元年6月13日現在

機関番号：82606

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15949

研究課題名(和文) 子どもをもつがん患者への支援モデルの開発

研究課題名(英文) Support system for cancer patients with young children

研究代表者

小嶋 リベカ (KOJIMA, rebekah)

国立研究開発法人国立がん研究センター・中央病院・ホスピタルプレイスタッフ

研究者番号：80746321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：子育て中のがん患者は年々増加し、その患者は、検査や治療を子育てと並行して実施し、社会生活を送っている。3年間に亘る研究成果は、主に2点ある。まず、未成年の子どもをもつがん患者、またその家族に関わる看護師が抱える困難について、実態調査を通じて具体的に把握されたこと、次に、がん患者の病期を限定せずに臨床にて用い得る親子支援ツールが作成されたことである。そのことは、専門家以外の医療従事者が、子どものいる患者のニーズに沿った家族支援の全国的な実践に貢献し得るだけでなく、がん患者とその子ども間のコミュニケーションを促進するためにアプローチし得る支援のあり方が提案された観点から高い意義があることと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、未成年の子どもをもつがん患者支援のあり方に焦点を当て、患者・家族の子どもに対する気がかりの実態調査・分析を行い、家族ケアを通じて医療者側が感じている関わりの困難感を調査した。その研究結果を反映しつつ、臨床の場において汎用性のある成果物を作成した。このことは、学術的な独自性と創造性を有するものと考えられる。さらに、その成果物は、家族機能の促進に着目しているため、今後、患者がどの臨床病期にあっても、医療者が子どもをもつがん患者と家族のニーズに対して心理社会的支援を行う際の媒体となり得る。このことは、実践面の確立として大きな成果であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：There are many cancer patients of the parenting generation, and to play the role as a parent along with their own treatment may provoke various anxieties and conflicts. There are two main research results over the past three years. First of all, through a fact-finding survey, the fact that what kind of difficulties the nurses have when being involved in caring for the cancer patients with minor children, and what kind of impacts cancer has on parents for child rearing were specifically grasped. Secondly a parent-child support tool was created. It can be used not only to help the non-professionals contribute to the nationwide practice of family support, but also to promote communication between cancer patients and their children. It can be said that the research is highly significant from these results.

研究分野：心理学

キーワード：未成年の子どもをもつがん患者支援 未成年の子どもをもつがん患者の気がかり 病名を告げられる子どもの年齢別比較 家族に関わる医療者の困難感 家族支援ツールの開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国立がん研究センター中央病院の入院患者のうち 18 歳未満の子どものいる患者の推定割合は約 4 人に 1 人であり、決して支援を求める対象人数は少なくない。その患者は、検査や治療を子育てと並行して実施し、社会生活を送っている。近年、子どもをもつがん患者の研究がされ始めているが、患者の必要としている支援についてはまだ具体的に把握されているとはいえ、明らかにされていないニーズの掘起こしが不可欠である。また医療者による子どもをもつがん患者の支援の必要性は認識されているが、その具体的な在り方については未だ十分な研究がなされていない。こうした状況を踏まえ、子どもをもつがん患者とその家族のニーズを把握ことや、それに沿った医療現場でのサポートのあり方を探索することで、医療現場における未成年の子どもを含めた家族ケアの向上が求められる。

2. 研究の目的

本研究では、未成年の子どもをもつがん患者とその家族への支援の必要性を踏まえ、下記の 3 点を明らかにすることを目的とする。

(1) 子どもをもつがん患者と家族ががん罹患後に抱える不安に関する実態調査

18 歳未満の子どもをもつがん患者・家族が抱える困難感と医療者に求める支援の在り方を明らかにすることを目的とする。

(2) 子どもをもつがん患者と家族を支援する上で看護師が抱える困難に関する実態調査

患者とその家族へ接することの多い看護師による患者支援の現状および困難さについて明らかにすることを目的とする。

(3) 未成年の子どもをもつがん患者への支援に用い得るツールの開発

がんの療養中に変化する親子の関係を再構築し、がん患者とその子どもがコミュニケーションを維持できることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 子どもをもつがん患者と家族ががん罹患後に抱える不安に関する実態調査

国立がん研究センター中央病院での 3 年間(2013 年～2015 年)の家族支援の取組の実態を後方視的に調査し、それを踏まえたアンケートを作成した。2018 年 2 月～4 月に国立がん研究センター中央病院に通院及び入院している未成年の子どもを持つ 20 歳以上 60 歳未満のがん患者および配偶者を対象に(n=152)、4 件法アンケート調査および分析を行った。

(2) 子どもをもつがん患者と家族を支援する上で看護師が抱える困難に関する実態調査

国立がん研究センター中央病院に勤務している看護師を対象に(n=23)、支援対象となる子どもの区分別(未就学児・小学生・中高生)に項目が分かれた関わり方の困難さや治療時期の異なりに即した支援課題についての質問紙調査を行い、質的分析を行った。

(3) 未成年の子どもをもつがん患者への支援に用い得るツールの開発

(1)と(2)で明らかにされた課題を一体として捉えるためにエキスパートコンセンサスとして、医師、看護師、絵本作家、子どもの専門家の意見を踏まえ、有効性と汎用化の可能性をもつ支援のあり方を検討し、家族支援ツールを作成した。

<倫理面への配慮>

本研究はヘルシンキ宣言に則り、「疫学研究に関する倫理指針(文部科学省・厚生労働省)」を順守し、調査研究実施に際しては国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 子どもをもつがん患者と家族ががん罹患後に抱える不安に関する実態調査

国立がん研究センター中央病院にて、2018年2～4月にアンケートを181人に配布し、有効回答を152人(84.0%)から得た。回答者の内訳は患者/配偶者143/9人、男/女52/100人、治療の状況は入院中/通院治療中72/80人だった(表1)。18歳未満の子の総数は237人、そのうち174人(73%)は病状を、152人(64%)は病名を親から伝えられていた(図1、図2)。子に伝えていない背景には、親としての気がかりが在り、親子の交流の困難さや親としての不全感を抱く思い、子への伝え方や対応に戸惑いや躊躇を覚えている思い等が挙げられた(図3)。

表1 患者および家族の背景

有効回答 (n=152)	
入院患者 / 通院患者	72/80
男性 / 女性	52/100
年代	
20s	3(2%)
30s	25(16%)
40s	95(63%)
50s	29(19%)
がん種	
乳がん	39(26%)
消化器がん	26(17%)
血液がん	16(11%)
肺がん	14(9%)
その他	44(37%)
患者の子ども (n=237)	
男児/女児/不明	120/114/3
一世帯平均(標準偏差)	1.6(0.7)
平均年齢(範囲)	9.5(0-17)

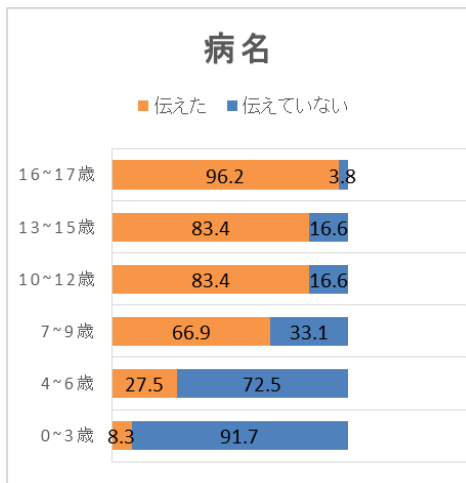


図1 病名告知の有無割合(n=237)

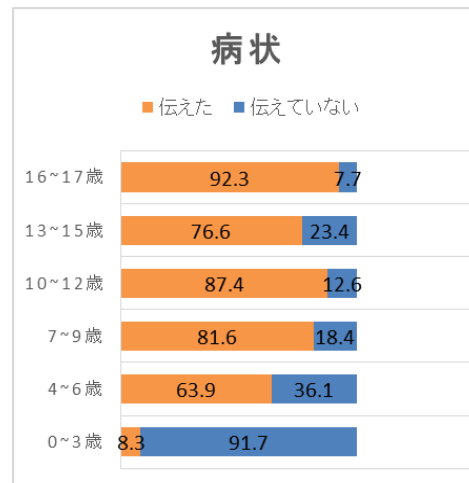


図2 病状告知の有無割合(n=237)

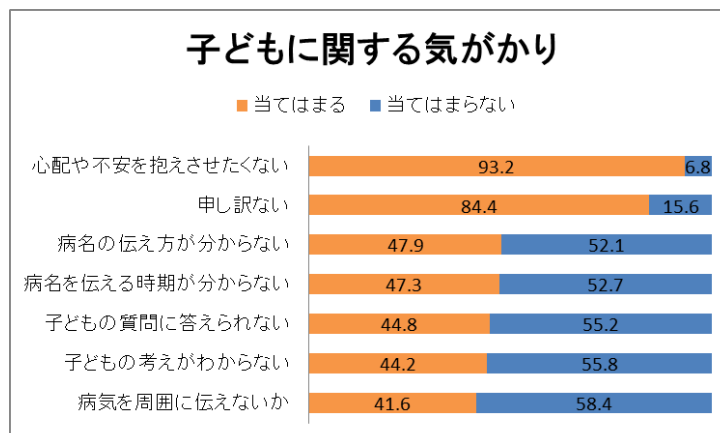


図3 未成年の子どもをもつ患者、家族が抱える子どもに関する気がかり(n=152)

(2) 子どもをもつがん患者と家族を支援する上で看護師が抱える困難に関する実態調査

2015年1月～3月に行われた質問紙調査(n=23)により、子どもや家族への声かけや終末期の関わりを困難と感じる看護師が多かった。また、未就学児への支援に関する困難感は低めである一方、小学生への支援は困難と感じる看護師が多かった。中高生への対応の困難感は、他の区分と比較すると低めであった。9割以上の看護師が子どもと関わる支援学習の方法として、集合教育と症例検討を求めている。

(3) 未成年の子どもをもつがん患者への支援に用い得るツールの開発

がんの療養中に変化する親子の関係を再構築し、がん患者とその子どもがコミュニケーションを促進できることを目的に、図4の家族支援ツール(冊子)を作成した。文面は、(1)で行ったアンケート調査の結果に基づき選択し、親が書き込み完成するノートとした。さらに、子どもの側からも親からのメッセージに回答できるためのシールを付録した。



図4 家族支援ツール(冊子)の表紙

(4) 考察

国立がん研究センター中央病院の入院患者の4人に1人が未成年の子どもをもつがん患者である。未成年の子どもをもつ患者が、親としての自責や罪悪感を抱えること、子どもに対して、親が病名や病状を伝えるか伝えないかは、子どもの年齢との関連が推察されることが明らかになった。さらに、家族ケアに携わる看護師が、特に終末期や臨死期において、小学生を含む家族への対応に困難を感じていることも明らかになった。患者の気がかりを把握しつつ、治療期～終末期まで段階に応じた支援を担えるための教育プログラムが特に求められることが確認された。

(5) 結論

今回、未成年の子どもをもつがん患者が抱える気がかりは相談者の属性や子どもの年齢においても多様であることが明らかになった。また、医療者が終末期・臨死期場面でどのように子どもの年齢に合わせてより適切に対応し得るか、基礎的知識や汎用性のある支援方法を習得する機会が特に求められることが確認された。したがって、未成年の子どもをもつ患者と家族の支援を行う医療者の育成体制の構築を行うと共に、早い段階から患者と家族がどのような状況と子どもに関する気がかりを抱いているのか等を聞き取り、個別のニーズに応じて多職種間で連携しつつ支援を行うことが不可欠であるといえる。

今後、さらなる研究を通じて、患者の気がかりと臨床病期、および患者の子どもの年齢と医療者に求める支援内容などの関連をさらに検証していく必要がある。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

小嶋リベカ、高田博美、石木寛人、木内大佑、里見絵理子、子どもをもつがん患者・家族に必要な支援の後方視的検討、Palliative Care Research、査読有、14 巻 2 号、2019、pp.73-77
<https://doi.org/10.2512/jspm.14.73>

〔学会発表〕(計9件)

小嶋リベカ他、がん患者・家族による18歳未満の子どもへの病名・病状告知の状況に関する研究、第24回日本緩和医療学会学術大会、2019

Rebekah Kojima 他、Concerns of Cancer Patients with Young Children、European Association for Palliative Care、2019

小嶋リベカ、未成年の子どもをもつAYA世代がん患者の支援を通して～当院におけるチャイルドサポートの取り組み～、AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術大会、2019

Rebekah Kojima 他、Needs for Cancer Patients with Young Children、Palliative and Supportive Care in Oncology Symposium、2018

小嶋リベカ他、未成年の子どもをもつがん患者および家族が抱える気付きについて、日本臨床死生学会年次大会、2018

高田博美、小嶋リベカ他、未成年の子どもをもつがん患者・家族に関わる看護師の困難感について、日本がんサポーターケア学会学術集会、2018

小嶋リベカ他、子どもがいるがん患者・家族の支援について、日本家族研究・家族療法学会、2018

小嶋リベカ他、がんの親をもつ子どもへの直接的支援～当院緩和ケアチームの取り組み～、日本緩和医療学会学術大会、2017

小嶋リベカ他、大切な大人ががんになったとき～子どもたちを支えるために、日本緩和医療学会学術大会、2017

〔図書〕(計1件)

小嶋リベカ、日本キリスト教団出版局、子どもとつむぐものがたり、2018、150

〔その他〕

小嶋リベカ、終末期の親を持つ子どもの心とその支援、エンドオブケア、査読無、3巻2号、2019、pp.19-24

小嶋リベカ他、金原出版、子どもの支援、平成27-29年度厚生労働科学研究費補助金「総合的思春期・若年成人(AYA)世代のがん対策の在り方に関する研究」班、『AYA世代がんサポートガイド』、2018、pp.104-105.

小嶋リベカ他、文藝春秋、子どものサポート、内富庸介編『がんはもう痛くない』、2018、pp.134-155

小嶋リベカ他、青海社、子どもたちとのコミュニケーション、有賀悦子ら編『がんの親を持つ子どもたちをサポートする本』、2017、pp.9-17

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：里見 絵理子

ローマ字氏名：(SATOMI, eriko)

所属研究機関名：国立がん研究センター中央病院

部局名：緩和医療科

職名：科長

研究者番号(8桁)40543898

(2)研究分担者

研究協力者氏名：阿部 泰之

ローマ字氏名：(ABE, Yasushi)

所属研究機関名：旭川医科大学・大学病院

職名：講師

研究者番号(8桁)40447090

(3)研究協力者

研究協力者氏名：石木 寛人

ローマ字氏名：(ISHIKI, hiroto)

(4)研究協力者

研究協力者氏名：高田 博美

ローマ字氏名：(TAKADA, hiromi)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。